

# さかずきの輪廻

小川未明

青空文庫



ました。）

（この童話はとくに大人のものとして書き

むかし、きようと京都に、りすけ利助というとうき陶器を造るめいじん名人がありました。が、ひとこの人の名は、あまりつた伝わらなかつたのであります。一代だいを通じてかやく寡作でありましたうえに、みやうり名利というようなことは、かんがすこしも考えなかつた人でしたから、べつにべつにこうさい交際をした人ひとも少なく、さくひんいい作品ができたときは、じぶんただ自分ひとりでまんぞく満足していると  
いうふうでありました。

しかし、世間せけんというものは、評判ひょうばんが高たかくなければ、その人ひとの作つくったものを重おもんずるものでありません。一人ひとりや、二人ふたりは、ま  
れに、目めをとめて見るみことはあつても、問題もんだいにしなれば、永え  
いきゆう  
久くに、それだけで忘わすれられてしまうのです。

落おち葉はにうずもれた、きのこのように、利助りすけの作品さくひんは、世よに  
表あらわれませんでした。そしてうす青あおい、遠山えんざんほどの印象いんしょうすら  
もその時代じだいの人ひとたちには残のこさずに、さびしく利助りすけは去さつてしま  
ました。

それから、幾いく十年ねんの間あいだ、惜おしげもなく、彼かれの作つくった陶器とうきは、  
心こころない人ひとたちの手てに取り扱あつかわれたのでありましよう。がらくたの  
間あいだに混まじっていました。

利助りすけの陶器とうきの特とく徴ちようは、その織細せんさいな美妙びみような感じかんじにありま  
した。彼は薄手うすでな、純白じゆんぱくな陶器とうきに藍あいと金粉きんぷんとで、花鳥かちようや、  
動物どうぶつを精細せいさいに描えがくのに長ちようじていたのであります。

瓦かわらのような厚あつい、不細工ぶさいくな焼やき物ものの間に、この紙かみのよううす  
い、しかも高貴こうきな陶器とうきがいつしよになつていゝといふことは、な  
んといふ心こころないことでありましよう？

しかも心こころない人ひとたちは、それをいつしよにして、手てあらく取と  
扱あつかつたのであります。こうして作数さくすうの少すくなかつた利助りすけの作さく品ひん  
は、時代じだいをへるとともに、いつしかなくなつてゆきました。

空そらに輝かがく星ほしが、一つ、一つ、消え失うせるように、それはさびし  
いことでした。そして碎くだけた作さく品ひんは、砂礫されきといつしよに、溝みぞや、

土つちの上うえに捨すてられて、目めから去さつてゆくのでした。

しかし、また、人にんげん間のほんとうの努力どりよくというものが、けつしてむなしくはならないように、真しんの芸げい術じゆつというものが、永えいきいきゆうゆう久くに、その光ひかりの認みとめられないはずがないのであります。

ひとつたび土どちゆう中ちゆうにうずもれた金きん塊かいは、かならず、いつか土つちの下したから光ひかりを放はなつときがあるように、利りすけ助すけの作さく品ひんが、また、芸げい術じゆつを愛あい好こうする人ひとたちから騒さわがれるときがきたのでした。

けれど、その時じぶん分ぶんには、少すくない品しな数かずは、ますます少すくなくなつて、完かん全ぜんなものとは、だれか、利りすけ助すけの作さく品ひんを愛あいしていたごく少しょう数すうの人ひとの家かてい庭ていに残のこされたものか、また、偶ぐう然ぜんのこことと戸とだなのすみにはほかの陶とう器きと重かさなり合あつて、不ふ思し議ぎに、破やぶれずに

いたものだけであつたのです。

「利助りすけというような名めいじん人があつたのに、どうしていままで知られなかつたろう。」と、陶器とうきの愛好家あいこうかの一人ひとりがいいますと、

「ほんとうの名めいじん人ひとというものは、みんな後あとになつてからわかるのだ、見識けんしきが高たかかつたとしてもいふのだろう。」と、その話はなしの相あ手てはさながら、名めいじん人が、その時代じだいでは、不遇ふくうであつたのを怪あやしまぬように答こたえました。

「私わたしは、利助りすけの作さくがたまらなく好すきだ。まあ、この藍あいいろ色の冴さえていてみごとなこと。金粉きんぶんの色いろもその時分じぶんとすこしも変かわらない。上じょうとう等とうのものを使つかつていたとみえる。」

「貧乏びんぼうな暮くらしをしたということだが、芸げい術じゆつのうえでは、

なかなかの貴族主義だった。」

「わたしは、利助の作った完全なさらがあるなら、どれほどの金を出しても、一枚ほしいものだ。」

「その考えは、ぜいたくだらう。なにしろ、あの薄手では、大事にして、しまっておいても保存は、容易ではない。」

「なぜ、あんなに、薄手に焼いたものだらうか。」

「あの薄手がいいのだ。あれでなければあの純白の色は出せないのだ。」

「もつとも、利助ほどの天才は、自分のものが長く保存されるためとか、どうかいような俗な考えはもたなかつたらう。ただ、気品の高いものを作り上げたいと思つていたにちがいない。」

「そのとおりだ。」

陶器とうきの愛好家あいこうかによつて、こんな話はなしがかわされたのは、すでに、

利助りすけが死しんでから、百年ねんちか近くたつてから後のちのことであつた。

ここに、ひとりひとりの陶器とうきの好きすな男おとこがありました。ちやうど江戸末えどま

期つきのころで、ある日ひ、日本橋辺にほんばしへんを歩あるいていまして、ふとかたわ

らにあつた骨董店こつとうてんに立ち寄よつて、いろいろなものを見みているう

ちに、台だいの上に置うえいてあつたさかずきに目めがとまりました。

男おとこは、それを手てに取とつてみますと、思おもいがけない、利助りすけの作つくつ

たさかずきでした。しかも無傷むきずで藍あいの色いろもよく、また描かいてある

絵えの趣おもむきも申もうし分ぶんのないものでありました。

「ほう、めずらしいさかずきだな。」

と、<sup>かれ</sup>彼は、<sup>こころおも</sup>心で思いました。

さだめし<sup>こうか</sup>高価のものであろうと思<sup>おも</sup>いながら聞<sup>き</sup>いてみますと、はたして相<sup>そうとう</sup>当<sup>あた</sup>な値<sup>い</sup>でした。しかし、ほしいと思<sup>おも</sup>ったものは、無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>をしても手<sup>て</sup>にいれなければ、氣<sup>き</sup>のすまないのが、こうした好<sup>こう</sup>事<sup>じ</sup>家<sup>か</sup>の常<sup>つね</sup>であります。男<sup>おとこ</sup>は、それを求<sup>もと</sup>めて、家<sup>うち</sup>に帰<sup>かえ</sup>りました。

彼<sup>かれ</sup>は、どんなに、その一つのさかずきを手<sup>て</sup>に入<sup>い</sup>れたことを、うれしく思<sup>おも</sup>ったでしょう。

「どうして、このうすいさかずきが、こわれずに、今日<sup>きょう</sup>まで残<sup>のこ</sup>っていてくれたろう。そして、ほかの<sup>ひと</sup>人の目<sup>め</sup>にとまらずに、俺<sup>おれ</sup>の目<sup>め</sup>にとまってくれたろう？ 不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>にも、また、ありがたいことだ。きつと、世<sup>せ</sup>間<sup>けん</sup>の<sup>ひと</sup>人は、利<sup>り</sup>助<sup>すけ</sup>という名<sup>めい</sup>人<sup>じん</sup>をまだ知<sup>し</sup>らないからだろ

う。これに描いてあるねずみの絵はどうだ？ この藍の冴えていて、いまにも匂いそうなこと、金色の——ちようの翅を彩つた、ただ一点ではあるが、——溶けそうに、赤みのある光を含んでい  
ること、ほんとうに、驚くばかりだ。」

彼は、さかずきを手にとつたまま、ぼんやりとしていました。街の暮れ方となりました。さまさまの物売りの呼び声がきこえてきたり、また人々の往來の足音がしげくなって、あたりは一時はざわめいてきました。こうして、やがては、しつとりとした、静かな夜にうつるのでした。

彼は、この黄昏方に、じつとさかずきを手にとつて、見入りながら、利助というような名人が百年前の昔、この世の中に

存在そんざいしていたことについて、とりとめのない空想くうそうから、夢ゆめを見るみような気持ちきもちがしたのです。

彼はかれ、うれしさをとおりこして、あるさびしさをすら感じかんました。そして、夜よる、燈火あかりの下したに膳ぜんを据すえて、毎まい晩ばんのように酌くむ徳と利りの酒さけを、その夜よは、利助りすけのさかずきに、うつしてみたのです。

「まあ、これを見みい。ねずみが浮ういて、いまにも飛とび出だしそうだ。  
 彼かれは、家内かないのものを呼よんで、利助りすけの作つくったさかずきの中なかをのぞかせました。

みんなは、陶器とうきについて、見分みわけるだけの鑑識かんしきはなかつたけれど、そういわれてのぞきますと、さすがに名めい人じんの作さくだという

気が起こりました。

「ねずみの下にある、実のなつています草は、なんでございませうか？」と、女房はきいた。

「これは、やぶこうじだ。なんといいではないか。」と、彼は、こう答えて見とれました。

「ようございませうこと。」

「ここが、名人じゃ、自然の趣きが、こんな小さなさかずきの中にあふれている感じがする。」

「しかし、よく、こんなさかずきが、見つかりましたものでございませうこと。」

「世の中には、ほんとうの目あきというものは少ないのだ。」

「いくら、名人めいじんが生まれても、ほんとうにわかる人ひとがなければ、知られずにしまうのでございませうね。」

「そうだ。」

彼かれは、こんな話はなしをして、当座とうざは、名人めいじんの作つくったさかずきが、手てにはいったことを喜よろこんでいました。

「このさかずきだけは、わらないようにしてくれ。」と、彼かれは、家内かないのものに、よくいいきかせました。

女房にようぼうをはじめ、家内かないのものは、そのさかずきを取とり扱あつかうことが怖おそろしいような気きがしました。

「どうか、このさかずきは、箱はこに入れて、しまっておいてくださいますか。わるとたいへんでございますから。」と、女房にようぼう

は、あるとき、彼かれに向むかつていったのでした。

彼かれは、しばらく、黙だまつて考かんえていました。そして、頭あたまをあげて、

おだやかな顔かおつきをして女にようぼう房ぼうを見みました。

「注ちゆううい意いをして、それでわつたときはしかたがない。なるほど、

このさかずきもたいせつな品しなには相そう違いないが、人にんげん間は、もつと

たいせつなものをどうすることもできないのだ。こうして、この

さかずきを愛あいぶ撫ぶする私わたしどもも、いつまでもこの世よの中なかに生いきては

いられるのでない。さかずきも大だい事じだが、だれの力ちからでもそれより

大だい事じな自じ分ぶんの命いのちをどうすることもできないのだ。そのことを思おもえ

ば、なにものにも万ばんぜん全ぜんを期きすることはかなわないだろう。」と、

彼かれはいいました。

ながあいだえどじだい  
 長い間の江戸時代の泰平の夢も破れるときがきました。江戸  
 まちまちせんらんちまた  
 の街々が戦乱の巷となりましたときに、この一家の人々も、  
 とお  
 ずっと遠い、田舎の方へ逃れてきました。そして、そこで、余生  
 おく  
 を送ったのであります。

えど  
 江戸から、田舎へのがれてくる時分に、みんないろいろなもの  
 す  
 を捨てて、着の身着のままに逃げなければなりません。女  
 ふだん  
 は、平常たいせつにしていた、くしとか、箆とか、荷物にならぬ  
 ものだけを持ち、男は、羽織、はかまというように、ほかのもの  
 も  
 を持つては、長い道中はできなかつたのです。

かれ  
 しかし、彼は、利助のさかずきを持つてゆくことを忘れませ  
 ん  
 でした。田舎の人となりましてからも、彼は、利助のさかずきを

取り出してながめることによつて、さびしさをなぐさめられたのであります。

こうして、彼は、晩年を送りました。そして、高齢でこの世の中から去つたのであります。彼が、なくなつても、そのさかずきだけは、完全の姿で最後まで残りました。

彼の女房は、いまおばあさんとなりました。そして、彼女が、生きながらえている間は、毎晩のように、利助のさかずきに酒をついで、これを亡父の御霊の祭つてある仏壇の前に供えました。

「お父さんは、このさかずきがお好きで、毎晩このさかずきでお酒をめしあがられたのだ。」と、彼女は、いいながら、線

香かうを立てて、かねをたたきました。

そのそばで、老母ろうぼのするのを見ていた子供こどもらは、

「そのさかずきは、いいさかずきなんですか。」と、ききました。

「ああ、なんでもいいさかずきだと、お父とうさんはいつていられた。

これをわからないように大事だいじになさいよ。これだけが、この家うちの宝

だと、いつてもいいんだから。」と、老母ろうぼはいいました。

子供こどもらは、うなずきました。そして、そのさかずきを大事だいじにし

ました。

やがて女房にようぼうも、この世よから去さるときがきました。子供こどもらは、

母ははの御霊みたまをも亡父ぼうふのそれといっしょに仏壇ぶつだんの中なかに祭まつつたのであ

ります。そして、母ははが生前せいぜん、毎晩まいばんのように、酒さけをさかずきに

ついであげたのを見ていて、母の亡き後も、やはり仏壇に酒をさかずきについであげました。

あるときは、仏壇に、赤くなつた南天の実が徳利にさされ、て上がっていることもありました。そして、その青い葉と赤い実のささつた下に利助のさかずきは、なみなみとこはく色の酒をたたえて供えられていました。

あるときは、清らかな、響きの澄んだ、磬の音が、ちようどさかずきの酒の上を渡つて、その酒の池がひじょうに広いもののように感じられることもありました。そして、ろうそくの火影がちらちらとさかずきの縁や、酒の上に映るのを見て、そこには、この現実とはちがつた世界があり、いまその世界が、夕焼けの中

にまどろむごとく思おもわれたこともありました。

子供こどもらは「仏ほとけさまのさかずき」だといって、そのさかずきをた  
いせつにしていました。そのさかずきをみだりに手てに取とつてみる  
ことも、汚けがれるからといってはばかりしました。

さかずきは、仏ぶつだん壇のひきだしの中なかに、いつもていねいにしま  
われてありました。そして、晩ばん方がたになると取とり出だされて酒さけをつ  
いで上あげられました。やがて、ろうそくの火ひがともりつくした時じ  
分ぶんに、磬かねをたたいて、さかずきの酒さけは、別べつのさかずきの中なかに移うつさ  
れました。

「おじいさんのめしあがった後あとの酒さけは、味あじがうすくなつた。」と  
いって、息むすこ子は、その酒さけを自じ分ぶんで飲のみました。

大事なさかずきだからというので、息子が、そのさかずきに酒  
 をついで上げたり、また、下ろさなかつたときは、彼の女房  
 がいたしました。女房は、真の父、母の子供ではなかつたけ  
 れど、もつともよく息子の心持ちを理解していたからです。そ  
 して、いつしか、彼と同じように、先祖の霊に対して、それをな  
 ぐさむることを怠らなかつたからです。

しかし、たとえ、いかように、心づくしをしても、もう、死ん  
 でしまった人は、永久にものをいわなければ、こたえもしな  
 い。仏壇に、ささげられたさかずきの酒は、ほんとうに一滴も  
 減じはしなかつたのです。

「好きな酒を上げて、お父さんは、めしあがらなければ、お菓



を思おもわせたのです。夜よるは、暗くらい外そとに、木枯こがらしがすさまじく叫さけんでいました。そんなとき、たたく仏壇ぶつだんの磬かねの音ねは、この家いえからはなれて、いつまでも頼たよりなく、荒野こうやの中なかをさまよっていました。いつしか、孫まごの時代じだいとなりました。彼はかれ、古ふるびた、朱塗しゆぬりの仏壇ぶつだんの前まえに立たつても、なんのことも感かんじなくなりました。

ある日ひ、仏壇ぶつだんのひきだしを開あけてみますと、小ちいさな箱はこの中なかに利助りすけのさかずきがはいつていました。彼かれは、これを取とり出だしてみましたけれど、それがいさかずきであるか、そうでないかということは、彼かれにはわかりませんでした。

けれど、孫まごは、先祖せんぞから大だい事じにしていたさかずきであるという

ことだけは知しっていましたので、これをだれかに、鑑かん定ていしても  
 らいたいと思おもいました。

近きん所じよに、一ひとり人のおじいさんがありました。この人ひとは、なんで

も、いまどきのものより、昔むかしのものがいいときめていました。書し  
 物ものに書かいてあることも、昔むかしのほうのが、義ぎが固かたくていいといっ

ていました。曆こよみも、新しん曆れきよりは、旧きゅう曆れきのほうが季き節せつの移うつり

変かわりによく合あっているといっていました。それで、時と計けいすら、

数字すうじの刻きざりであるものよりは、日ひ時どけい計けいのほうが、正せい確かくだといっ

て、船ふねの形かたちをした、日ひ時どけい計けいを日ひ当あたりに出だして、帆ほ柱ばしらのような、

まっすぐな棒ぼうから落おちる黒くろい影かげによつて時じ刻こくをはかるのでした。

孫まごは、そのおじいさんのところへ、さかずきを持もってまいりま

した。

「おじいさん。どうか、このさかずきを見てくださいますし。」と、彼は頼たのみました。

きれい好きずな、おとこやもめのおじいさんは、家いえの内うちをちりひとつないように清きよめていました。おじいさんは、なにをたずねられても、知らぬとしいったことはありません。で、村むらでの物もの知りではありません。さつそく、大おおきな眼め鏡がねをかけて、

「どれ、そのさかずきかい。」とていって、手てに取とって子し細さいにながめました。

「たぬきかな？ いや、ねずみかな、そうだ、ねずみらしい。絵えは、あまりうまくないな。けれどこの藍あゐの色いろがなかない。い

まどぎのものに、こうした、藍あゐの冴さえた色いろは見みられないな。まあ、いい品しなだろう。」といいました。

「だれが、造つくったのでしようか。」と、孫まごはたずねました。

おじいさんは、また、さかずきを手に取とりあげて、ながめました。

「そうだ、利助りすけと書かいてある。聞きいたことのない名なだな。」

結局けつぎよく、たいした品しなではないが、まあ古ふるいさかずきだから、

いまどぎのものとかくらべると悪いわることはないというのでした。孫まごは、家いえへ帰かえりました。彼はかれ、さかずきをまた紙かみに包つつんで、仏壇ぶつだんのひきだしにいれておきました。

寒さむい、雪ゆきの降ふる国くにに、孫まごはいたくはありませんでした。彼かれは、

いつからともなくにぎやかな東 京の街に憧れていました。そして、いつかは、東 京に出て、なにか仕事をして、かたわら、勉強でもしようという望みを抱いていました。

とうとう、彼は、家のことを姉や、弟とに頼んで、自分は東 京へ出ることになりました。そのとき、彼は、昔から家にあつた掛け物や、金銀の小さな細工物や、また、長く仏さまに酒を上げるさかずきになっていた、ひきだしの中なかにしまつてあつた利助のさかずきなどをひとまとめにして、それを荷物の中なかにいれました。彼は、東 京へ出てから、なにかたしになるであろうと、思つたのでした。

彼は、東 京へきてから、ある素人家の二階かいに間借りをし

ました。そして、ひるま昼間は役所へつとめて、よる夜は、やがく夜学に通つたのであります。あるとき、かれ彼は、しょもつ書物を買うのに、すこし余分よぶんの金かねが入用にゆうようでありました。そのとき、ふと、くに国を出る時じぶん分に、なにか荷物の中へ入れて持つてきた金銀きんぎんの細工物さいくものとさかずきのまだ、う売らずにあつたことを思おもいつきました。

「どうせ、あのだばこ入いれの飾かざりや、おびど帯止めの銀ぎんの金具かなぐは、たいした値ねにもならないだろうが、もしあのださかずきが、いいさかずきであつたなら、値ねになるかもしれない。しかし、いつかおじいさんに見みせたら、あまりほめていなかつた。それでも、みんな一ひとまとめにして売うつたら、いくらかの金かねになるだろう。」と、かれ彼は思おもいました。

孫は、東京へ出ると、じきに掛け物は売ってしまったので  
す。

「いくら、本物でも、作のできがよくなければ、値になるもの  
ではありません。これは、作のできがよくありません。このほう  
は、汚れていますからだめです。これですか、こいつは、私に、  
鑑定がつきません……。」

そんなふうには、骨董屋から、まことしやかにいわれて、掛け  
物は、安い値で手放してしまいました。

それで、彼は、こんどは、正直な人間に売らなければならぬ  
と思われました。

「りっぱな店を張っている骨董屋のほうが、かえって、人柄

がよくないかもしれない。だれか正しょうじき直ちか。そんな古道具屋ふるどうぐやを呼よんできて見みせよう。」

彼は、そう思おもいました。

彼は、出でかけてゆきました。そして、耳みみのすこし遠とおい、声こえのすこし鼻はなにかかる、脊せの曲まがった男おとこを連つれてきました。男おとこは、無造作むぞうさくに、毎まい日にち、ぼろくずや、古鉄ふるてつなどをいじっている荒あらくれた手で、彼かれの出だした、金銀細工きんぎんさいいくの飾かざりりとさかずきを、かわるがわる取とつてながめていました。

「こちらの飾かざりりだけを××××××でいただきましょう。このさかずきは、どうしてもよろしゅうございます。」と、古道具屋ふるどうぐやはいいました。

彼かれには、このとき、ふたたび田舎いなかにいる時分じぶん、近所きんじよの物知りものしりのおじいさんが、「これは、たいしたものではない、ただ古いふるからいいのだ。」といった、その言葉ことばが思い出おもされたのです。

文明ぶんめいのこの社会しゃかいに生うまれながら、昔むかしのものなぞをありがたがるのは、じつにくだらないことだと、彼かれは簡単かんたんに考かんがえたのであります。

「このさかずきも、つけてやろう。」と、彼かれはいつてしまいました。

古道具屋ふるどうぐやは、それを格別かくべつ、ありがたいとも思おもわぬようすで、金銀細工きんぎんざいくの飾かぎりといつしよに持もつてゆきました。

このさかずきのことことが忘わすれられた時分じぶん、彼かれは、ある日ひなにかの

書物で、利助という、あまり人に知られなかつた陶工の名  
 人が、昔、京都にあつたといふことを読みました。そして、  
 強く胸を突かれました。なぜなら、彼の家に昔からあつた、あの  
 さかずきには、たしかに利助という名がはいつていたからです。  
 「そうだ、あのさかずきには、利助と名がしるしてあつた。また、  
 本には、ねずみや、花や、鳥の絵などをよく描いたとあるが、た  
 しかに、あのさかずきの絵はねずみであつた。」と、彼は思った  
 のでした。

彼は、ほんとうに、とりかえしのつかないことをしたと知つた  
 のです。それにつけて、近所の物知りのおじいさんが、そのじ  
 つ、なにも知っていないのを、知るもののごとく信じていたのを

うらめしく、愚かしく思いました。

「なぜ、村の人たちは、あのおじいさんのいったことを信じたろう。そうでなかったら、自分も信ずるのでなかったのだ。」と、後悔をしました。

また、「なぜ、自分は、さかずきを、あんなものによくわからない、古道具屋などに見せたらう？ もつといい骨董屋にいつて見せたら、あるいは、利助という名工を知っていたかもしれない。」と、彼はそのときとは、まったく反対のことを考えました。

彼は、こうなつては、だれを憎むこともできなく、自らを憎みました。

彼は、また、「自分の祖父は、よほど、趣味の深い、目ききであつた。」と思ひました。そして、彼は、そう思うと、いまままで感じなかつた、なつかしさを、祖父に対して感ずるようになったのです。

世にも、その数の少ない利助の作を、祖父が手にいれて、それを愛したこと、そのさかずきは長い間、我が家の古びた仏壇のひきだしの中に入れてあつたのを、自分が、むぎむぎ持ち出して捨てるように、この東京のつまらない古道具屋にやつてしまつたと考えると、彼はなんとなくすまないような、またとりかえしのつかないようなくやしさを感じたのです。そして、どうかして、それを探し出さなければならぬと思ひました。

孫まごは、さつそく、いつか自分の宿じぶんのやどに呼よんできた古道具屋ふるどうぐやへたずねてゆきました。そして、二、三か月前げつまえにやった、さかずきは、まだ店みせに置おいてないかと、あたりに古道具ふるどうぐがならべてあるのを見みまわしてからききました。

「あれは、すぐ売うれてしまいました。」と、耳みみの遠とおい、脊せの曲まがった男おとこは、とがった顔かおつきをして答こたえました。

「だれが、買かっていったか、わからないでしょうか？」と、彼かれは、なんとなく、あきらめかねるので聞ききました。

「あなた、この広ひろい東とうきよう京きやうですもの……。」と、男おとこは、きつねのような顔かおつきをして、皮肉ひにくな笑わらい方かたをしたのです。

彼かれは、それに対たいして、このときだけは、怒おこる勇気ゆうきすらありません。

んでした。

「なるほどそうだ。」と思ひました。

東京の街は、広いのでした。大海に、石を投げたやうな

ものです。小さな、一つのさかずきはこの繁華な、わくがやうに、  
どよめきの起こる都会のどこにいったかしたものではありません。

そう考えると、彼は、絶望を感じるより、ほかにはないのでした。

しかし、また、それは、どこかに存在しなければならぬものでした。

そのさかずきを、買った人は、日本橋の裏通りに住んでい

る骨董屋こつとうやでありました。その人ひとは、まことに思おもいがけない掘ほり出し物ものをしたと喜よろこびました。そして、店みせに帰かえつてから、そのさかずきを他たの細こまかな美術品びじゅつひんといっしよに、ガラス張ばりのたなの中なかに収おさめて陳列ちんれつしました。

江戸時代えどじだいのあの時分じぶんから、東京とうきようのこの時代じだいに至いたるまで、また、幾十年いくねんをたちましたでしょう。

さかずきは、それでも、無事ぶじに、ふたたび江戸時代えどじだいと変かわらない、東京湾とうきようわんに近いちか、空そらの色いろを、街まちの中なかからながめたのであります。そして、またここで、日影ひかげのうすい、一日いちにちをまどろむのでした。

さかずきにとって、田舎いなかへいったこと、仏壇ぶつだんに酒さけをついで上あ

げられたこと、毎日、毎日、女房が磬をたたいたこと、箱に収められてから、暗い、ひきだしの中にあつたこと、それは、ただいっぺんの夢にしか過ぎませんでした。

さかずきには、家の前をかごと通つたことも、いま人力車が通り、自動車がかかることも、たいした相違がないのだから、無関心でした。

ただ、ある日のこと、太鼓の音と、笛の音と、御輿をかつぐ若衆の掛け声をききましたので、しばらく遠く聞かなかつた、なつかしい声をふたたび聞くものだと思いました。

そして、自分は、またどうして、同じ所へ帰つてきたらうかと疑いました。

はかない、薄手うすてのさかずきが、こんなに完全かんぜんに保存ほぞんされたのに、その間あいだに、この街まちでも、この世よの中なかでも、幾たびか時代じだいの変遷へんせんがありました。あるものは、生まれうました。またあるものは、死しんで墓はかにゆきました。

それが、さかずきにとつて、芸術げいじゆつの力ちからでなくて、偶然ぐうぜんな存在そんざいだと、なんでいうことができましょう。

この街まちでは、ちようど昔むかしからの氏神うじがみさまの祭日さいじつに当あたるのでした。そして、いつも、昔むかしと変わかわらない催しもよおをするのでした。

おりも、おり、例れいの孫まごは、この日ひこの街まちを通とりかかりました。

そして、華はなやかな、祭まつりの光景こうけいを見て、自分じぶんの家いえも祖父そふまでは、この東とうきよう京きやうに住すんでいたのだなと思おもいました。

御輿みこしの通とおる前ぜん後ごに、いろいろろな飾かぎり物ものが通とおりました。そのうち  
に、この土地とちの若わかい芸妓げいぎれん連ひに引ひかれて、山車だしが通とおりました。山  
車しの上うえには、顔かおを真まつ赤かにしたおじいさんが、独ひとり他たの人物じんぶつの  
間あいだに立たつて、この街まちの中なかを見み下おろしていました。

彼かれは、この山車だしの上うえの、顔かおを赤あかくした、人ひとのよさそうなおじい  
さんを見みているうちに、自分じぶんのお祖父じいさんのことなどを思おもいまし  
た。自分じぶんは、そのお祖父じいさんの顔かおを知らなかつたけれど、たいへ  
んに酒さけの好すきな人ひとで、いつも赤あかい顔かおをしていたといいうことを聞き  
ていました。また趣味しゆみの深ふかかつた人ひとでもありました。利助りすけのさか  
ずきは、そのお祖父じいさんの愛あい用ようしたものだと思おもい出だすにつけて、  
彼かれは、なんとなくお祖父じいさんをかぎりなくなつかしく思おもいました。

「きつと、お祖父<sup>じい</sup>さんも、あの山車<sup>だし</sup>の上<sup>うえ</sup>に立<sup>た</sup>つていようなおじいさんであつたらう。」と、彼<sup>かれ</sup>は思<sup>おも</sup>いながら、街<sup>まち</sup>を過<sup>す</sup>ぎる山車<sup>だし</sup>をながめていました。

若<sup>わか</sup>い、派手<sup>はで</sup>やかな装<sup>よそお</sup>いをした女<sup>おんな</sup>たちが、なまめかしいはやし声<sup>こゑ</sup>で山車<sup>だし</sup>を引<sup>ひ</sup>くと、山車<sup>だし</sup>の上<sup>うえ</sup>の自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のおじいさんは、ゆらゆらと赤<sup>あか</sup>い顔<sup>かお</sup>をして揺<sup>ゆ</sup>られました。

おじいさんは、にこやかに、街<sup>まち</sup>の中<sup>なか</sup>のようすを笑<sup>わら</sup>いながらながめていました。そして、山車<sup>だし</sup>の下<sup>した</sup>を通<sup>とお</sup>る車<sup>くる</sup>や、仰<sup>あおむ</sup>向<sup>む</sup>いてゆ<sup>ひ</sup>く人<sup>ひと</sup>々に、いちいち会<sup>え</sup>釈<sup>しゃく</sup>をするように、くびを振<sup>ふ</sup>っていました。

山車<sup>だし</sup>の上<sup>うえ</sup>のおじいさんは、両<sup>りょう</sup>側<sup>がわ</sup>の店<sup>みせ</sup>をのぞくように、そして、その繁<sup>はん</sup>昌<sup>じょう</sup>を祝<sup>いわ</sup>うように、にこにこして見<sup>み</sup>下<sup>お</sup>ろしました。

やがて、山車だしは一軒けんの骨董店こつとうてんの前まえを通りましました。その店みせにはガラスだなの中なかに、利助りすけのさかずきが、他の珍めづらしい物品ぶつぴんといつしよに陳列ちんれつされているのでした。

山車だしの上うえのおじいさんは、その前まえにくると、一段だん、くびを前後ぜんごに振りましましたが、やがて、若い女わかおんなのはやし声ごえとともに、その前まえをも空むなしく通り越とこしてしまいました。

後あとには、ただ、永えいきゆう久きゆうに、青あおい空そらの色いろが澄すんでいました。そして、たなの中なかには、ねずみを描かいた、金粉きんぷんの光ひかりの淡あわい利助りすけのさかずきが、どんよりとした光線こうせんの中なかにまどろんでいるのでした。

こうして、たがいに遇あうたものは、また永えいきゆう久きゆうに別わかれてしま

見<sup>い</sup>ました。いつまた、おじいさんと利助<sup>りすけ</sup>のさかかずきと孫<sup>まご</sup>とが、相<sup>あ</sup>



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

底本の親本：「小川未明童話全集 3」講談社

1950（昭和25）年

初出：「婦人公論 9巻1号」

1924（大正13）年1月

※表題は底本では、「さかずきの輪廻《りんね》」となっていて  
す。

※初出時の表題は「盃の輪廻」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2017年12月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# さかずきの輪廻

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>